

20～30歳代健診の必要性について

財団法人 郡山市健康振興財団 健康センター¹⁾

東海大学 医学部 基礎医学系 医学教育・情報学²⁾

○車田 美由樹¹⁾ 大櫛 陽一²⁾

【目的】

健診は生活習慣を見直す機会であるにもかかわらず、20～30歳代以下の健診、検査内容の多くは、事業所や個人などにゆだねられており、不十分であると考え。今回、血液データの異常率の変化や肥満度(BMI)との関係から20～30歳代で健診をする必要性について報告する。

【対象】

2002年度～2009年度に当施設の健診で血液検査をした20～39歳までの男性14,199名、女性10,532名の計24,731名(夜勤者を除く)。

【方法】

対象者の血液データを「男女別・5歳ごと基準範囲」にあてはめ、基準値以下、基準範囲内、基準値以上にわけた。血液データを経年変化、年代変化、BMI(18.5未満、18.5～24.9、25.0～29.9、30.0以上にわけた)との割合について、それぞれカイ2乗検定を行った。

【結果】

経年変化では、30代男性で肝機能異常が減る傾向がみられた。年代変化では、20代女性で空腹時血糖異常の割合が多くみられた。BMIとの関係では、20～30歳代男女で肝機能異常との関係がみられた。

【考察】

経年変化と年代変化から血液データの変化は、年齢によるものだけではなく社会的な背景や生活習慣が大きく影響していると考え。また、BMIとの関係で20～30歳代男女に肝機能異常がみられたことから、すでに血液データに生活習慣の影響がでていると考え。20～30歳代の健診は、軽度異常の早期発見、早期介入が可能であり疾病予防には重要であると考え。